

## 修 士 論 文 要 旨

看護学専攻 生涯看護学 分野 母性看護学 領域	学籍番号 214601 氏 名 石川優子
論文題目	育児休業中の体験が復職後の助産師のキャリアに与える意義
キーワード	育児休業 体験 復職 助産師 キャリア
<p><b>【背景】</b> 一般的に妊娠・出産・育児などの女性特有のライフイベントは就業中断や転職が生じやすいという意味で、女性のキャリア発達の障害事象と考えられる。一見するとキャリアの中断ととらえられがちな育児休業期間中に、助産師はどのような体験をし、それらが復職後の助産師に何をもたらすのかは明らかになっていない。しかし、妊娠・出産・育児に深く関わる助産師にとって育児休業での体験こそが、キャリア発達をしていく上で意味のあることではないかと考えた。</p> <p><b>【目的】</b> 育児休業中の体験が復職後の助産師に何をもたらすかを明らかにすることで、助産師のキャリアに与える意義を見出す。</p> <p><b>【研究方法】</b> 研究協力者は、第1子の育児休業を6か月以上2年未満取得し、復職後3か月～12か月程度経過した助産師7名とした。半構成的面接による聞き取り調査を行い、データを収集した。インタビュー内容から逐語録を作成し、育児休業中の体験と復職後の助産実践、助産師としてのキャリアに関連する項目に注目しデータを抜き出し、コード化した。コード化したデータについて共通性と相違性を比較しながらカテゴリー化した。データ分析においては、母性看護学を専門とする教員、質的研究を専門とする教員にスーパーバイズを受け、データ分析及び解釈の整合性が保持できているかについて十分に検討を行った。なお、三重県立看護大学研究倫理審査会および研究協力施設の倫理審査を受審し承認を得て実施した。</p> <p><b>【結果】</b> 育児休業中の体験として、母親としての当事者体験から『助産師としての自己を喪失する育児体験』『家族としての役割の醸成』が、母親と助産師であり続けようとすることから『仕事に身を置くことへの葛藤』『母子の伴走者であることを希求する』が、助産実践を振り返ることから『育児休業に対する認識不足を自覚』『実感を伴って対象への共感性が増す』『生活を見据えた母子ケアの提供』が、育児休業から復職後の助産師にもたらされた。</p> <p><b>【考察】</b> 育児休業中の体験が復職後の助産師のキャリアに与える意義として、助産師としてではなく一人の母親として解決困難な状況に直面することで自らの限界を受け入れ、助産師としての成長に結びつくこと、仕事と育児のバランスに試行錯誤しながらも助産師としての課題を明確にし、新たな助産師像を形成していくこと、助産師自身が育児休業中さまざまな体験し、気づきをえることで、対象の理解やニーズに応じたケアの提供に繋がること示唆された。</p> <p><b>【結論】</b> 妊娠・出産・育児という女性特有のライフイベントそのものが助産師としての日々の成長やキャリア発達に結びついていることを、助産師一人ひとりが自覚できるような周りの支援が必要である。また看護管理の視点においても、育児休業をキャリア発達の過程であることを認識しながら支援に向けた関わりをしていくことが必要である。</p>	